

獨斷的な餘りに獨斷的な」を讀む

（新潮、昭和四十九年一月號）

（五十年三月號）

●「小説神髓」以來、小説は未だ美術になつてゐない
美術にならうとする手續のどこかに間違ひがあつたに違ひない
のである。辭言へば純文學と通俗文學との境界線は
何處にあるのかと問ふ基準は、單に思想の深淺にある
とは言ひ切れぬ。文體にあるとも言へない。この連載中に
それが發見出来るという自信は我々は全く無い。
恐らく、そこにも無い、ここにも無い」といふ破壊作業に
終始するであらう。今はせめてそれを不毛なものに終らせ
たかといふと思ふだけである。

●「警々休載の辯」（新潮、昭和五十年五月號）
より抜粋

●「サリふ」即ち「言ひ言葉」の流練を疎かにして「言ひ言葉」に
のみそれを期待する事は不可能であり、間違つてゐる。
これは根本的な事だから、さういふ過ちは「言ひ言葉」そのもの
に對する無自覺な考へ方、生みかゝる生じたものであり、
さういふ土壤に文學が藝術として立つ筈が無い。

●アリストテレスが「詩學」のうちで述べてゐる様に、詩には
娯樂が無ければならぬ。娯樂といふ言葉が心に入らぬ
なら、それを樂しむ、快さと言ひ換へてもよい。日本の
近代小説が不目下になつたのは、ミューズ禮拜の爲に、
娯樂に背を向け、それを排除しようとしたからである。
近代化は藝術から娯樂を放逐した。その間の精神の
政治學を充分明する事こそ、最も文學的課題。

作者の思想や人間観察力かどうのかが、この二の次々話である。

小説も評論も言葉によつて知識を興へてくれる前に、失づ言ふべきものを経験させてくれなければならぬ。そしてそれが読者にとつて経験となるものは、作者と自己の違いを共にするリズムの快感が無ければならぬ。純文學と通俗文學との別は、そのリズムの快感の有無にあるのであつて、文體にあるのではない、まして思想にあるのではない。

「醒めて醒れ」へ再び暫く休載の辯として

（「新潮」昭和五十一年八月號）

生活の場で解決すべきことを作品の中に持つ込む愚を犯する。実行と藝術とを峻別せよと、私は口を酸くして言つて来た。か今日の文學の大半は「実行」において「藝術」においても、解決しなければならぬ問題といふものを持つてゐない。したがつて藝術でないことはもうさう、実行とも相違つてゐない。兩者を結びつける自己といふものか存在しないのだ。その意味で、この書も多少の役には立たうか。

作家の態度 文庫版 後書より

（昭和五十六年 八月八日）

「獨斷的」は長編であり、ここで採り上げられてゐる明治と戦後時代の文士達自身の持つてゐた課題、あるいは錯誤に關する考察そのものが戦後生まれの私は、少々縁遠く感じられる。恒存か、これを書いてゐたか昭和五十年であり、文中で「今日も同様の問題が存在する」と

とくへておいて、明治以来、昭和五十年代に至って
るほど、日本近代文学のしか存在してゐたといふ
「獨断」は興味深くはあるが、さういふところから
三十年を経て今日の私にとって、この作品は
いかに意味を持つのか、大いに疑問だ。
せめて、恒存の、何の問題かと言つてみるのかで
なく、得る限り、正確に読みとりなく思ふ。
目頭の五つの引用は、そのための私自身の
参考文である。

各章の二要素及び問題点……

一 セルフアイデンティティの意味の確認

・カナダ人の「セルフアイデンティティ」を求めて得られぬ悩み

セルフアイデンティティ「自己同一性」「自己一貫性」

セルフアイデンティティ「アイシオン」

「その事実の保証・証明・確認」即ち「自己確認」

・山崎正和氏の「セルフアイデンティティ」の問題

山崎氏の戯曲は「私小説」である。

・カナダの大学での講義は不評・失敗

日本文学は明治以来、未だに近代化の過程にあり、
近代日本文学史が書ける様で、出発点に、まだ到達して
ゐないといふ「逆説的獨断」は、カナダ人の問題意識とは
ちがふが、たゞ。

そもそも、日本文壇で諒解を得る、近代日本文学史の
通念を、得るは全く得てゐないが、たゞ。

・「私小説」に対する恒存の持論

私小説は、作者自身から自己に対して、自分から藝術
家であるといふことを、それアイデンティファイするため
作業である。

★明治以来の日本文壇から近代化の過程下、適應異常を
きたし、カタタ人に見られるのと同様、常に作家が、
自己確認をせねばならぬ習性を持つ様になるり、
それから日本独自の「私小説」下生む土壤となった。と、
恒存は言ってみるのか。

二、私小説の意味

・「私小説」といふものの正體がよく掴めない

「文學史的」位置付けに困る 説明について

その論と目の徹底したものについて、その論と目だけは

明快に解るが、私の讀書體驗として書かせる一々の

作品と必ずしも一致しない。

逆に、一人称體、あるいは作家の主人公、を書かれたといふ

程度は定義では、私小説といふ概念はこぼはる理由が

←

私小説といふ概念は不必要とするか

日本の自然主義以後の小説すべて私小説とした方が

わかり易い

・私小説の典型といった外表の黒影の運作にか

私は私小説と感している

大衆小説に私小説の腹具を感じることがあるか、この私小説
とは一體何か

・「蒲團」は三人称で書かれてゐる。

私小説の最大公約数は「私」そのものではなく
告白し難い本能的感情の操られる自分の「醜い姿」を
告白する事と定義しなければならなくなる。

私小説の概念規定に「私」そのものは必要條件でない
←

「耽溺」以下五部作も、黒髪連作も 私小説の系譜から
除かれる。無理に系譜を整へることもあるまい。

それとも、それは執拗に「私」を主張して来るのか
「破戒」である。

「破戒」こそが私小説の「元凶」であるといふ恒存の主張

P 492 下段参照

「破戒」はセルフ・アイデンティフィケーションといふ自己探しの
作業からなされた作品だ。

自然主義、社会小説、農村小説、告白小説といふ外装
抑圧と裏の間の假装を施さなくては、真骨頂を保証
し得ない自己、自由、情感、自然、かゝる屈折した
心理こそ 私小説への傾斜を促す 本質的要因。

※ 近代日本文学史を整理する上で、日本独自の私小説
といふ概念は、一種の史観の如く明快に規定されて
ゐるか、恒存は、この通念のあいまいさか耐へ難い
ものだ。一章に続き、こゝで、さういふ「破戒」を
めぐり、私小説への傾斜を促す 本質的要因と
しての、藤村の屈折した心理を剔出した。

三 自分やうなものでも、

どうかしてほきたい

「破戒」は内に書きたいものか、或は書かん値するものか
何も無いやに無理して書かれた小説である。ああ、自分か
やうなものもどうかしてほきたいといふのは、ああ、自分か
もダメも、どうかして 小説か書きたい」と讀み通した方が
解り易い。

日本の自然主義の「歪み」は、人間或は自己の内部に
潜む悪い面を導く、自ら行き届いておろしたところから
はいたと言へる。

告白に値する内容のない告白小説なり、告白の爲め告白に
自己の真意を賭けるといふ自己陶醉に終った。

告白「出来ぬことによつて生ずる虚構。悩める、身を委ねて
みたかったやあり、その悩める、藝術家として自己の
真意を 確認してゐた、たのめ ほかなるまい。

←

そこに 自分か藝術を永である事の保證を 目的とする。
私小説の芽がある。

藝術作品を作る事よりも、藝術を永になる事か急務
かいた時代か、あ、た、な、

恒存は「破戒」といふ作品が持つてゐる、近代日本文学史

上、通念的評価を事毎に否定する。文壇史家や
文壇関係者か、私小説の通念的概念を楯として
今日もてるは、安全地帯で自己保身してゐる状況
に一石を投じたのであろう。恒存にとつては、
「道德感の淵濁や欠如か、道德感の深さ、或は
反道德・非道德と誤讀されかるる文壇的風潮」か
許し難みだ。

四 ひと言 佐伯氏の場合について

佐伯氏は、私の「破戒」観を誤解してゐる。

「破戒」断罪はつまり、「フォーニ」小説の發端ではないか
私は、「裁断衣」ではない 意識せる 獨断家だ。

日本語の本物・贋物という意味が 英米語にあるか否か。

佐伯氏・山崎氏は 西洋に習ふ。劣等感に拘泥し、
日本のセルフアイデンティフィケーションを手に入れようとして、
餘りにも明快に、日本と西洋の相違点を剔出し
日本勝訴の判決文作製に意を用ゐ過ぎる様に
思はれる。

私は 一個の常識人として、「破戒」を通じ、近代日本人
における小説のいや文藝の在り方を、社會的・道徳的に
否定してゐるのに過ぎない。セルフアイデンティフィケーションの
物を書くとは、社會的にも許されぬし、個人としても恥づべき
「破戒」は、二重の意味で誤解されてゐる。
すきだ。

。社會性、思想性もろろな本格の近代ロマンであり
自然主義文藝の、最初の代表的大作とみなされてゐる
。破戒、こそ 和小説的な、蒲團が始祖とされてゐる。

★ 日本語の本物・贋物という意味を英米語の
ジェニイン フォーニ、つまり、ふりりと対比して
厳密に思考してゐるところは、恒常の面目躍如たる
ものがあり、とても面白い。佐伯氏・山崎氏に對して
サリえるいけれど、本質的に批判してゐる点も
興味深い。

五、「蒲團」について

「蒲團」に対する憤懣は、こんな活字の羅列を讀まなければならぬ。そしてまたそんなものを讀む義務があるか如く教へられて來た文壇的通念に対する社會的・道德的關心に基いては、公憤に他たない。

花袋は常識を以て自己を縛らねば手に入らぬ様子を自己を初めから持つてはゐるが、自由戀愛も女性解放も、自分自身。思想や道德と何の父然的關係も持つてはゐない。

検査官論告

私小説の始祖は、「破戒」である。
「蒲團」は近代日本文學史から外して讀まない。

六

現在使用されてゐる高校生用の「國語便覧」には、「破戒」日本文學最初の本格的な自然主義の小説、「蒲團」私小説の始まりとも言ふべき作品と紹介されてゐる。通念が改変されてゐるまではあるが、文學史上そのものは授業でしか教へられてはゐない様であり、作品の存在すら知らない高校生もかなりゐるのではなからうか。

六、藝術と云ふ疑ふといふに氣持

逍遙な小説神髓の作家主義

小説(美術)は人生における意義に關しては、餘りにも乏しき効用主義にとらはれ、安易に手を通りした。

・二葉亭は、逍遙や自然主義作家か、不問に附した
根本問題に直面してゐた。

小説・文學・藝術といふものを彼等の世界観
歴史観 自然観のうちに位置づけねば氣が
済まなかつた。曲がりなりにも、哲學、形而上學の
とば口になつてゐた。

・彼の「悲劇」とは

哲學がヘーゲルの流れを過す観念論であるも
かかはらず、唯物論を基調とする小説技法を
採りしやうとしたところになつた。

・花袋は「東京の三十年」(大正六年)、「近代の小説」(大正十二年)
において二葉亭の言動にふれてゐる。

書かざる二葉亭、煩悶せる二葉亭の思ひをなす。

・この章は、逍遙、花袋に就する二葉亭の文學的
立場について、文學史研究者の如く、事實關係を
詳しく紹介し、考察してゐる。恒なる二葉亭への
関心度は高い。

七 實行と藝術といふこと

・あの時の文壇で問題になつてゐた、實行と藝術とい
ふ問題と、二葉亭の心を終生悩ませ通して
藝術をどうする、疑ふ心持をした。花袋は混同して
ゐなかつたか。

・二葉亭の境地について

・ 離脱と参加の同時成立が許される甚難がある

。二葉三子はその偽善と感傷に堪へ切れず、
積極的に参加と探る

。泡鳴は参加の下心へ開け広げに示して顧みず、
離脱の線と大走った

←

花袋・藤村・自然主義作家及び泡鳴自身も、
文學・藝術の人生、社会における意義・効用を
疑ふことはなかった

・ 客感をも實在に實行し即したものである意味で
重んじる 二葉三子と泡鳴の相違点について

。泡鳴「實行」即藝術に客感一本體の元的描寫論

。二葉三子 當時の作家達の言ふ客感とは

認めようか？たゞではないか

← 彼ら身動きも来すべからざる限界とは、何であつたか